

Title	題述文と存現文：主語・主格・主題・叙述(部)など に関して
Author(s)	佐治, 圭三
Citation	大阪外国語大学学報. 29 p.111-p.121
Issue Date	1973-02-28
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/80463">https://hdl.handle.net/11094/80463</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 題述文と存現文

——主語・主格・主題・叙述（部）などに関して——

佐 治 圭 三

## The Topic-Comment Sentences and the Descriptive Sentences

——With reference to Subject, Subjective Case,  
Topic and Predicate Phrase——

SAJI Keizo

This paper attempts to justify the legitimacy of the distinction between two types of sentences: the ones in which the speaker makes a comment on a topic that he (or the hearer) has chosen, and the others in which the speaker merely describes existence of things, affairs or phenomena.

A topic-comment sentence is composed of the topic and the predicate phrase which expresses the speaker's comment on the topic. The predicate phrase consists of the main predicate and its adjuncts. The adjuncts include phrases expressing various grammatical cases, the subjective case (Noun Phrase+*ga*) being just one of them.

A descriptive sentence is composed only of the predicate phrase.

The sentences with Nominal or Adjectival predicates are usually Topic-comment type, whereas those with Verbal predicates may or may not be so. Certain kinds of stative verbs (*'sho-dōshi'*) or verbs of perception constitute only the topic-comment sentences.

The topic is sometimes expressed explicitly by the phrase 'Noun Phrase+*wa*,' but it is also expressed only implicitly, that is, not by '*—wa*'. The implicit topic can sometimes be found in the predicate phrase (e.g. *Watashi ga Saji desu*. 'I am Saji.'), or it can be the situation which is not overtly expressed.

### は じ め に

本稿で扱った内容は概略以下のようなものである。

述語文は事物・現象の存在を表わす存現文と、主題とそれに対する解説の部分から成る題述文とに分かれる。主題は話し手が、それについて解説・説明すべき題目として提示したものである。

解説の部分は述語とそれに連なる成分から成り、これを叙述（部）と呼ぶ。叙述部には主格が含まれることがある。存現文は叙述部だけから成る文である。題述文には顕題の文と陰題の文があり、陰題の文には転位・陰題の文と、状況・陰題の文がある。名詞文、形容詞文はつねに題述文である。動詞文は存現文である時と、題述文である時とがある。或る種の所動詞や知覚動詞が述語になる時には、題述文にしかない。また存現文は常に確言・肯定の平叙文である。

本稿では術語を以下の意味で用いる。

述語＝体言に助動詞のついた文節、及び用言または用言に助動詞のついた文節。それらに終助詞のついた文節も。また必要な時には文末の述語、文中の述語などと言い分ける。

徒(ただ)＝体言または体言相当語句、及びそれに一部の副助詞（格助詞「が」の前に来るもの）のついたもの。

主語＝意味上、述語の表わす素材の意味（動作・作用・変化・存在・状（情）態・属性など）の主体・本体であるものを表わす語、及び語相当（文節ではない）。すべての述語について陰に陽に存在するもの。

主格＝構文上、述語と結びついて、ことがらのまとまりを表わす成分。主語としての徒に格助詞「が」「の」のついた文節、及びそれ相当の徒。

主題＝構文上、それについて解説・説明されるべき題目として提示された成分。叙述と対立し、統一されて題述文を作る。徒に係助詞「は」「も」のついた文節、及びそれ相当の徒。なお、主題は文節相当の連文節で示される場合もある。そのような主題を、必要な時には、主題部と呼ぶこともある。

叙述＝構文上、主題を解説・説明する部分。主題と対立し、統一されて題述文を作る。文末の述語を中心とし、それに連なり一体となる連用成分から成る。その中に主格が含まれることもある。

叙述が連文節からできている場合、必要な時には、それを叙述部と呼ぶ。存現文は主題を持たない文であるが、構造はここに言う叙述部と同じなので、その構造を言う時には、便宜、この名称と呼ぶ。

## (一)

述語文における「主語」「主格」「主題」といったことについては、久しい以前から論争がくり返されてきており、それについての論文、発言も数えきれないほどの数にのぼるであろう。けれども、大久保忠利氏の言をかりれば、『日本文法陳述論』p. 415)

日本語の文法論に少しくわしい人は、だれでも「主語」（または文＝主部＋述部）についての日本の文法家たちの意見がまだ一致していない、どころかいくつかに大きく分かれて対立していることを知っている。

と言わざるを得ないのが実状なのである。

このように、いまだに定説をみないのは、この問題が、まさに文法論の根本問題であって、文法家の言語観の根本と直接に結びついている問題であるからということの他に、それぞれの文法

家の用いる「主語」「主格」「主題」等の術語の意味内容に少しずつずれがあって、議論が十分にかみ合ってこなかったこともその理由の一つとして考えられるのではないであろうか。

従って、私見を述べるに当っては、日本の文法家が、この問題をどのように扱ってき、それぞれこれらの術語をどのように用いてきたかの歴史をたどる必要があるが、紙幅の制限がそれを許さない。<sup>(注1)</sup>

また、この問題は、昭和46年度の秋季の国語学会の文法分科会のテーマ「～は～である」としてもとり上げられ、発表と討論があった。それについても意見を述べたいのであるが、省略に従わざるを得ない。ただ、そこでも「は」「が」の問題が討論の大きな部分を占めていた(『国語学88』)ことから、この問題は、「は」「が」の働きをどのように考えるかという問題と密接に結びついているといえる。そこで、まず、「は」「が」の機能の問題を明らかにしておく必要があると考える。

## (二)

「が」は格助詞である。たとえば、

①鈴木さん 友だち 佐藤さん 先生 紹介する(こと、の)。

②鈴木さんが友だちを佐藤さんの先生に紹介する(こと、の)。

①ではことからの素材は示されているが、その間の関係がまったく示されていないために、ことがらとしてのまとまりがなく、何を表わしているのか分からない。②では、素材が、下線を施した助詞によって結び合わされることによって、ことがらとしてのまとまりを持ってくる。つまり「が」は、「を・に・と・の」などと同様に、素材(＝語)と素材との関係を表わすことによって、ことがらのまとまりを示す格助詞の一つである。また③と

③鈴木さんによって友だちが佐藤さんの先生に紹介される(こと、の)。

から、「が」は、それのついている語(及び語相当)が、述語の素材の意味——渡辺実博士の「素材概念」(『国語構文論』)——の主体・本体(＝主語)であることを示す格助詞であることがわかる。そこではじめに示したように、主語に「が」のついた文節を「主格」と呼ぶことにする。また「が」には、「我が国」のように連体格を示すものがあり、そちらがむしろ元であることは言うまでもないが、この稿では「が」は、だからこそ、ことがらのまとまりの内部で働くのだと言うに止めたい。

「は」は係助詞である。たとえば

④あなたは、きのう・三時に・京都へ・行きましたか。

という文の・の箇所に「は」を入れて、

⑤あなたは、きのうは三時に京都へ行きましたか。

などのように言うことができる。この「は」の代りに「が」を入れることができないのは言うまでもない。こうして用いられた「は」は、⑤では、「きのう」という部分を特示して(「おととい」でも「今日」でもないという意味で)、強く示すと同時に、その部分を特に強く述語に結びつけ(とりたて)て、質問の中心が「きのう行ったかどうか」であることを示す働きをしてい

る。また④に対して

⑥私はきのう三時に京都へ行きはしませんでした。

と答えることもできるというように、述語の中の素材的部分を特示することもできるのである。

このように「は」は、文中の連用成分を限定・特示する機能を持っている点で、広くは「だけ・ばかり・さえ・しか」などの副助詞の中に入れられるのであるが、それらの副助詞とも違う性質を持っている。<sup>(注2)</sup>

係助詞「は」と格助詞「が」などとの違いは、山田孝雄博士が明かにされたことであるが、格助詞は連体修飾成分の中におさまってしまうが、係助詞は（それが徒についている場合には）おさまらない、

⑦○あなたは私が作ったプランをどう思いますか。

×あなたは私は作ったプランをどう思いますか。

とか、格助詞や副助詞は、仮定条件を表わす条件節などの中におさまってしまうが、係助詞はおさまらない

⑧○あの人が行かなければ、私は行く。

○あの人さえ行かなければ、私は行く。

×あの人は行かなければ、私は行く。

といったことにも表われる。

格助詞「が」はことがらのまとまりの中で働くのに対して、係助詞「は」は、ことがらのまとまりをつきぬけて、文としてのまとまりを成しとげるまで働くのである。<sup>(注3)</sup>

⑨あの人は行かなければ、後で困ります。

このように、根本的に性格の異なる「は」と「が」が、文中でいかなる違いを示すか、以下、述語文のいろいろな場合においてそれをみていきたい。<sup>(注4)</sup>

### (三)

述語文のうち、名詞文「AはBだ」は、Aが種概念、Bがそれを包みこむ類概念を表わして、AがBに包みこまれる＜特殊としての主語を一般としての述語が包摂する＞（森重敏『日本文法の諸問題』p. 74）いわゆる包摂判断を表わす。

⑩クジラは動物だ。

は、〔A<B, クジラ<動物〕である。この場合は、これをひっくり返して、

⑪動物はクジラだ。

は成り立たないし、

⑫動物がクジラだ。

も成り立たない。また

⑬クジラが動物だ。

も、この文を外側から支える特殊な文脈があるのでない限り成り立たない。このこと一つをとり上げても、〔主語+は〕は〔主語+がは〕の「が」が付き合わないから落ちたものにすぎないと

いう議論には首肯し難いものを感じる。

AとBが同一事物の違った言い方である場合、〔A=B〕である場合は、両項をひっくり返して、

⑭東京は日本の首都だ。

⑮日本の首都は東京だ。

のように言うことができる。このようにひっくり返してできた両文は、同じことを表わしているように見えるが、文の意味としては別なのである。⑭は

⑯東京は（どんなところですか）？

という質問の答えとしてある文であり、⑮は

⑰日本の首都は（どこですか）？

という問の答である。⑯の間に⑮と答えたり、⑰に⑭と答えるのは普通ではない。「Aは」の部分は世の中の森羅万象の中からAを問題としてとり上げることを示しており、「Bだ」の部分はそれに対する解説・説明をなすものである。「Aは」の部分の一般の呼び方に従って「主題」と呼び、「Bだ」の部分は一般の「解説」「説明」を採らずに「叙述」と呼ぶことにする。また、主題と叙述とが対立することによって統一される文を「題述文」と呼ぶことにする。その構造を示せば、

主題——叙述。

名詞文に於て、〔A=B〕である場合には、

⑱東京が日本の首都だ。

のように言うことができる。この文は⑯への答ではなく⑰への答としてあるのであり、課題は「Bだ」の部分にあって、「Aが」の部分はむしろその解答だという意味で、＜解説——主題＞の「転位文」<sup>(註5)</sup>と呼ばれたり、「Bは？」「AがBだ」の「Bは」の部分が陰に存在している文だということで「陰題」と呼ばれたり<sup>(註6)</sup>するものである。筆者は、「AがBだ」の全体が一つのまとまりを示しながら言外の主題に応じており、その主題を顕在させることがむしろ普通ではない文をすべて「陰題」の文と呼び、⑱のように叙述の内部に主題が含まれているような陰題の文を、「転位・陰題」の文と呼びたいと思う。また叙述が「AがBだ」のようにことがらとしてのまとまりを示して、全体として主題に応じている（連文節をなしている）場合を「叙述部」と呼び、同様に主題が連文節から成る場合を「主題部」と呼びたい。ただし本稿では、必要がある時以外はそれぞれ、「叙述」「主題」で代表させていく。図示すれば

〔Bは〕——〔AがBだ。〕〔転位・陰題〕——叙述部

⑲この家は、窓が南向きだ。

└叙述部┐

⑳あなたが行ったのは、北海道ですか。

└主題部┐

また⑱は、⑲の答であるほかに、

㉑どこが日本の首都ですか？

の答でもあり得る。㉑は転位・陰題の文であって、「（日本の首都は）どこが日本の首都ですか」

のように理解し得るものであるが、このような文中の疑問の語に「は」をつけて、

㉒どこは日本の首都ですか？

などと言うことはできない。その理由は、「どなたは？」「誰は？」「いつは？」などの表現があり得ないことと考え合わせて、何かわからないものを課題としては、答の出しようがないのと同様、疑問の語を足がかり＝主題としては、解説＝叙述の出しようがないからだと言えよう。（なお注6参照）

名詞文は、顕題・陰題の区別はあってもすべて題述文だと言えよう。けれども名詞文のすべてが包摂判断（その一種としての「一致判断」を含めて）を表わすのではない。㉓などは形容詞文の表わす判断に類する判断を表わしており、代用陳述をなす

㉓ぼくはうなぎどんぶりだ。

なども包摂判断を表わすものではない。（後述）

#### （四）

㉔クジラは大きい。

㉕クジラは立派だ。

などの形容詞文も題述文である。「クジラは」の部分が主題、「大きい」「立派だ」の部分が叙述をなしている。この種の文は、主語の持つ無限の属性・状（情）態の中から、その一つを取り出して述べるものである。主語の中に、その属性、状（情）態の存在を認めるものだと言ってもよい。㉔は、「クジラには大きいという点がある」という意味である。

形容詞文にも

㉖山が美しい。

の形の文がある。この文は転位・陰題の文「（美しいのは）山が美しい。」であり得るほかに、「そのあたりはどうですか？」といった質問の答でもあり得る。ということは、㉖は、時間・空間的に限定を受けた場所を基にし、それに有形・無形の種々の要素が加わった「状況」に対して、その中にある属性の一つ「山が美しい」を引き出して判断を表わしたものだと言えよう。言い換えれば、㉖のような文は、その全体が状況を主題とする叙述であり、その主題が顕れないところの陰題の文であると把握できるのである。この種の文を「状況・陰題」の文と呼ぶことにする。

〔状況〕——〔山が美しい。〕

形容詞文には、いわゆる総主の文といわれる構文をとるもの、たとえば、

㉗象は鼻が長い。

がある。ここでは「象は」の部分を主題とし、「鼻が長い。」の部分を叙述部と理解する。

㉘私は水が飲みたい。

についても同様に、「水が飲みたい」の全体が叙述部をなして、「私」の情態について説明をなしているとみる。「飲みたい」が形の上でも意味の上でも形容詞相当になっているから、「水が」のように主格があらわれるのである。「水が飲みたい。」は「水」に「飲みたい」と表現すべき

属性があることを話し手が認知した表現で、そう認知したのが話し手である私だというのが「私は水が飲みたい。」という文なのである。

象は——鼻が長い。

私は——水が飲みたい。

「ほしい・かなしい・恋しい」など、主観的認知を表わす形容詞はその属性の主体と、それを認知する主体との、二つの主語を常に持っているものだということができる。その属性の主体の方を情意の向う対象だという意味で、「対象語」と呼ぶ<sup>(注7)</sup>ことは差しつかえないことであろうが、その用語は、

㉙私は水を飲みたい。

などの「を」のつくものにとっておいて、「～が」の方は主格と呼んでおくことに不都合があるうとは思えない。

## (五)

動詞文についても、主語が「～は」の形で（或いはそれ相当の徒で）主題として顕在する（省略という形も含めて）文が題述文であることについては問題がないであろう。

その本は——ある。

雨は——降っている。

次に、所動詞のうち自発の「思われる」、自然可能の「見える」「聞える」、可能の「できる」「読める」、常に状態的な「要る」、存在の「ある」などは、前節で見た主観性形容詞などと同じように「～は～が～」という構文を作る。

㉚私は故郷のことが思われる。

㉛私は山が見える。

㉜あの方はスキーができる。

㉝あの方は子どもがある。

これらの文は、ある種の状（情）態の存在を認知するものだということができるのではなからうか。これらの文の主題の部分、「～には」とも言えることからわかるように、その状（情）態の存在の場所を示すものとも言える。そして、その場所が、有情の個者の心中、感覚でしかあり得ない場合は、その状（情）態の存在を認知する者もその個者でしかありえず、他者が認知することはできない。だから、「思われる。気がする」などは、推量（「だろう」など）や、確認（「のだ」<sup>(注8)</sup>）の表現が付くのでない限り、㉙や次の文

㉞私（に）は変な気がする。

のように、話し手自身のこととしてしか表現できず、その点でも、主観性形容詞と似ているのである。その状態の存在の場所が、個者である場合でも、その存在が客観的に認知できる場合には、他者のこととして表現することもできる。（㉚㉛など）

㉙～㉚は、いずれも、その存在の場を個者の内に有する「気持」「能力」など、無形のもの



の状态的存在であって、他者たる不特定の多者が、外から直観的に認知することのできないものだから、題述文にならざるを得ない。能動詞の中でも、「思う」「わかる」「知る」「感じる」など、個者の心的活動を表わす動詞については同様のことが言えて、これらの動詞も題述文をしか作らないようである。

㉔山が見える。

になると、「山が見える」という状態の存在の場所は時間的な限定を受けた空間的な場所である。従って「見える」のは「私」にとってと同時に、同じ位置を占める「我々」にとって「見える」のでもある。けれどもそれはすべての人（全体者）にとって見えるのではない。その位置を占めていない人、盲目の人には見えないはずである。従って㉔は、「山が見える状態にある」という事実の存在を言っているとともに、全体者でない多者たる我々に通じるはずのものとしての「私」が「見ることができる」ということの表現であって、客観的な状態の存在と同時にそれに対する話し手の認知の表現が、不可分の形で表現されたものである。従って㉔は、形容詞文の場合と同様、状況に対してその状態の存在を認知した、状況・陰題の文とも言えるのである。

〔私・我々は〕——山が見える。〕

〔見えるのは〕——山が見える。〕

〔状況〕——山が見える。〕

## （六）

㉕山がある。

になると事情が違って来る。この文が顕題の省略の文、転位・陰題の文であり得るのは言うまでもないし、また状況に対する陰題の題述文でもあり得るであろう。

〔状況〕——山がある。〕

けれどもその判断の質が「見える」などとは違っている。「見える」の場合の話し手の認知は、全体者でないところの多者に通じるはずのものであったが、「ある」の場合は、話し手が「ある」とすることは、話し手と同じ位置を占める多者に通じるものであると同時に、そこに居合せない人にも、盲目の人にも同様に言えるはずであり、全体者に通じる形で「ある」のである。「山」は全体者の認知において「ある」のであり、誰が認めようが、認めまいが、「ある」のである。かくして「山がある。」は、話し手の何かに対する判断ではなくして、「山がある」ことそのことが、客観的な事実として言いたてられているのである。それは、もはや状況に対する判断などではなく、状況は彼方にかすんでしまっ、意識から消え去り、事物の存在そのものが前面に出てきて、それを言いたてている文、つまり三上氏の「無題」（注6参照）の文である。「無題」という以上、それはもはや題述文とは認めないということである。

㉖雨が降っている。

㉗犬が猫を追っかけている。

についても同様のことが言える。これらは現象の存在を言いたてている文である。（他の文である可能性もあることは言うまでもない。）

これらの文は、主題がなくて、叙述部だけで成り立つ文である。このように事物・現象の存在を言う文を、今までは、三尾砂氏の「現象文」<sup>(注9)</sup> という名で呼んできたが、この名は誤解をひき起すことがよくあるので、中国語の文法で同種の文を呼ぶ名の「存現文」<sup>(注10)</sup> を採りたいと思う。

存現文を図示すれば、次の如くであろう。

山がある。

雨が降っている。

犬が猫を追っかけている。

存現文は、以上の如く、叙述部だけでできている文であるが、その叙述の中心の述語がいろいろに変容しても存現文であるところに変わりはないかという点、そうではない。述語が過去の「た」になっても事情は変らない

㊸きのう、雨が降った。

が、確認の「のだ」や推量の表現が加わると様子が変わってくる。

㊹山があるのだ。

㊺雨が降るだろう。

㊻犬が猫を追っかけているそうだ。

これらはすべて状況・陰題の文になっていると思うのである。さらに、否定<sup>(注11)</sup> や意志や命令や疑問の表現も、文を題述文にしてしまうようである。

㊼山がない。

㊽雨が降っていますか。

この辺をもっとくわしく調べてみたいが、今は余裕がない。とにかく存現文は、事物、現象の存在を直観的に把握するものだから、確言の肯定の平叙文でしかあり得ないようである。

## (七)

題述の題述文について、以下のことを付け加えておこう。

今まで扱ってきた題述の文は、すべて主語が主題になったものであった。けれども主題には常に主語がなるのかということそうではない。次の文の「鈴木さん」は

㊾鈴木さんは私を山田さんに紹介した。

㊿鈴木さんは私が山田さんに紹介した。

㊽㊿鈴木さんは私が山田さんを紹介した。

㊾では主語、㊿では目的語、㊽㊿では補語である。こういうことについては、三上章氏が、『象ハ鼻ガ長イ』に詳述しておられる。同じ「鈴木さん」が「鈴木さんは」という形で、主語、目的語、補語と、種々であり得るということは、「～は」によって表わされる主題そのものには、述語

(或いは叙述部中の他の成分)との関係があらかじめ含まれているのではないということであり、係助詞「は」が何かの格助詞を代理したり、代行したり、含んだりしているのではない(注5参照)ということであり、主題と叙述との論理的格関係は、主題と叙述部全体とのかかわりの中で、決定され、理解されるということである。古くは、主題は主格とともに「徒」で示されるのが普通であったことを考えれば、主題は、論理的格関係を自らは示さないところに成立するのだと言うべきであろう。そもそも主題としてある語を示すということは、話をその語に限定するということであり、それについて何が語られるかわからない段階で、あらかじめ格関係を示しておくことはできないはずである。「～は」を分解して「～といえは」といったり、逆に「ては」「ってば」が係助詞とされたり(注12)するのも、「話をそれに限定する働き」として係助詞を理解すべきことを語っていると思うのである。

④⑧あの人は？

という問に対して、

④⑨あの人はこの頃顔を見せません。

と答えたり、

④⑩あの人は、私が病院へ連れて行きました。

と答えたりできるところに主題の特色が表われているのであって、「あの人には？」といった問などは、それに先行する文脈がなければ出てくるはずもないし、それに対する叙述の骨組はすでにきまっているはずである。もともと「徒」でないものに「は」をつけ加えても、それは連用成分の強調、とりたてにしかならない。もともと論理的格関係を示さない徒に、論理的結びつきの流れを断つ係助詞「は」が付くことによって、主題は深く切れ、切れることによってきわめて強く叙述と結びつくのである。主題と叙述の結び付きは、論理的格関係による結び付きとはまったく質を異にする関係であり、森重教授の説かれる「断続の関係」なのである。(注13)

従って主題と叙述との関係はかなり多様であり得る。『象ハ鼻ガ長イ』から例を借りれば、  
〔( )内は三上氏が「は」の代行と言われるもの〕

⑤①B氏は奥さんが入院中です。(×ノ)

⑤②理事は任期を二年とする。(×ノ)

⑤③花は、吉野を推し、もみじは高雄を賞する。(×ニツイテ)

⑤④(犯行の)場所は、屋内説が圧倒的だった。( " )

なお、次の例は、三上氏が「無格」と言われるものである。

⑤⑤人工衛星を打上げたのは、ソ連が最初だ。

また、代用陳述の

⑤⑥ぼくはうなぎどんぶりだ。

などは、本来、動詞文の形で表わすべき題述文を、題述文の典型である名詞文「AはBだ」の形に縮約したもので、ここにも、主題と叙述との関係の多様さの一端が表われているというべきであろう。

なおまた、叙述部の中の成分が、とりたてを受けて、主題となった場合、

私は— 酒は—好きですが、ビールは—きらいです

これらを「第二次の主題」と呼ぼうと思う。第三次の主題もあるかも知れない。

## お わ り に

許された紙幅はすでに尽きようとしている。以上では、十分には意を尽くせなかったのであるが、それでも私見の骨組だけは示し得たと思う。なお述べ残した点を今後の課題として記しておきたい。

「も」は係助詞としては、機能的には「は」と同じで、意味的には、松下大三郎博士が「合説」、佐久間鼎博士が「共説」といわれるような意味で、「は」の「分説」、「特説」と異なるものだ<sup>(注14)</sup>と一往は言うことができるであろう。が、「も」には副助詞としての用法があり、「は」とかなりの違いを持っているので、よく調べてみるまでは断言をさしひかえたい。

また、本稿で、「叙述部」というものを認めたのであるが、これは従来の「述部」とは異なる概念のものである。この概念は、文語に現われる最狭義の係り結び、つまり、＜ぞ・なむ・や・か→連体形、こそ→已然形＞なる現象を理解する上で有用なものだと思う。これらの係り結びは、叙述部の内部で働くものだと思うのである。このことについては、いずれ機会を改めて論じたいと思っている。

なお、文頭の英文のレジュメは、本学助教授寺村秀夫氏にお願いして翻訳していただいたものである。付記して感謝の意を表わさせていただきたい。

1972年9月6日

注1 『日本文法陳述論』にくわしい歴史がたどられている他に、『口語文法講座6用語解説篇』のその項(p. 125~135)が便利である。

注2 森重敏「係結」(『続日本文法講座1』p. 39)参照。なお拙稿「副助詞」(『月刊文法昭和45年3月号』)も。

注3 山田孝雄『日本文法学概論』p. 490参照。

注4 述語文の種類については、拙稿「外国人に対する日本語文法教育」(『講座正しい日本語5』)参照。

注5 三尾砂「主題・総主・題目語・対象語」(『口語文法講座2』p. 156)

注6 三上章『現代語法序説』p. 82

注7 時枝誠記『日本文法口語篇』p. 277

注8 拙稿「『ことだ』と『のだ』」『日本語・日本文化第三号』(大阪外大留学生別科紀要)

注9 三尾砂『国語法文章論』p. 82

注10 本学助教授大河内康憲氏の御教示による。

注11 宮地裕「否定表現」『文論』p. 182参照

注12 森重敏『日本文法の諸問題』p. 246~261

注13 森重敏『日本文法——主語と述語——』p. 89

注14 松下大三郎『標準日本口語法』p. 336~337 佐久間鼎『現代日本語法の研究』p. 220~221